

# 母

太宰治

青空文庫



昭和二十年の八月から約一年三箇月ほど、本州の北端の津軽の生家で、所謂疎開生活いわゆるそかいをしていたのであるが、そのあいだ私は、ほとんど家の中にばかりいて、旅行らしい旅行は、いちども、しなかつた。いちど、津軽半島の日本海側の、或る港町あに遊びに行つたが、それとて、私の疎開していた町から汽車で、せいぜい三、四時間の、「外出」とでも言ったほうがいくらいの小旅行であつた。

けれども私は、その港町の或る旅館に一泊して、哀話、にも似た奇妙な事件に接したのである。それを、書こう。

私が津軽に疎開していた頃は、私のほうから人を訪問した事は、

ほとんど無かつたし、また、私を訪問して来る人もあまり無かつた。それでも時たま、復員の青年などが、小説の話を聞かして下さい、などと言つてやつて来る。

「地方文化、という言葉がよく使われているようですが、あれは、先生、どういう事なんでしょうか。」

「うむ。僕にもよくわからないのだがね。たとえば、いまこの地方には、濁酒がさかんに作られているようだが、どうせ作るなら、おいしくて、そうしてたくさん飲んでも二日酔いしないような、上等なものを作る。濁酒に限らず、イチゴ酒でも、桑くわの実酒でも、野葡萄のぶどうの酒でも、リンゴの酒でも、いろいろ工夫くふうして、酔い心地のよい上等品を作る。たべものにしても同じ事で、この地方の産

物を、出来るだけおいしくたべる事に、独自の工夫をこらす。そうして皆で愉快地に飲みかつ食う。そんな事じゃ、ないかしら。」

「先生は、濁酒などお飲みになりますか。」

「飲まぬ事もないが、そんなに、おいしいとは思わない。酔い心地も、結構でない。」

「しかし、いいのもありますよ。清酒とすこしも変らないのも、このごろ出来るようになったのです。」

「そうか。それがすなわち、地方文化の進歩というものなのかも知れない。」

「こんど、先生のところに持って来てもいいですか。先生は、飲んで下さいますか。」

「それは、飲んであげてもいい。地方文化の研究のためですからね。」

数日後に、その青年は、水筒にお酒をつめて持って来た。

私は飲んでみて、

「うまい。」

と言った。

清酒と同様に綺麗きれいに澄んでいて、清酒よりも更に濃い琥珀色こはくで、アルコール度もかなり強いように思われた。

「優秀でしょう？」

「うむ。優秀だ。地方文化あなどるべからずだ。」

「それから、先生、これが何だかわかりますか？」

青年は持参の弁当箱の蓋をひらいて卓上に置いた。

私は一目見て、

「蛇だ。」

と言った。

「そうです。マムシの照り焼です。これもまた、地方文化の一つじゃないでしょうか。この地方の産物を、出来るだけおいしくたべる事に、独自の工夫をこらした結果、こんなものが出来上ったんです。地方文化研究のためにも、たべてみて下さい。」

私は、観念して、たべた。

「いかがです。おいしいでしょうか？」

「うむ。」

「精が、つきますよ。これを、一度に五寸以上たべると、鼻血が出ます。先生はいま、二寸たべましたから、まだ大丈夫。もう二寸たべてごらんさい。四寸くらいたべたら、ちようどからだにいいでしょう。」

私は仕方なく、

「それでは、もう二寸、ごちそうになりましたしょう。」

と言って、たべた。

「いかがです。からだだが、ほかほかして来やしませんか。」

「うむ。ほかほかして来たようだ。」

突然、青年は、声を挙げて笑った。

「先生、ごめんなさい。それは、青大将なんです。お酒も、濁酒



じやないんです。一級酒に私がウイスキーをまぜたんです。」

しかし、私はそれから、その青年と仲よしになった。私をこんなに見事にかつぐとは、見どころがあると思つた。

「先生、こんど僕の家へあそびに来てくれませんか？」

「たいぎだ。」

「地方文化が豊富にありますよ。お酒でも、ビールでも、ウイスキーでも、さかなでも、肉でも。」

その青年の名は、小川新太郎といつて、日本海に面した或る港町の、宿屋の一人息子ひとりむすこだといふ事を、私は知つていた。

「それを餌えさに、座談会じやないのか？」

私は、所謂文化講演会だの、座談会だのに出て、人々に民主主

義の意義などを説き聞かせるのは、にがてなのである。いかにも自分がにせもので、たぬき狸のお化けのような気がして来て、たまらないのである。

「まさか、先生のお話なんか聞きに来る人は、無いでしょう。」  
「そうでもあるまい。現に君が、僕の話を押聴しにこうして度々たびやって来る。」

「ちがいますよ。僕は、遊びに来るのです。遊び方の研究をしに来ているのです。これも文化運動の一つでしょう?」

「よく学び、よく遊ぶ、というやつか。その着想は、しかし、わるくないね。」

「そんなら、僕の家へ、何の意味も無く、遊びに来てくれてもいい

いじやありませんか。きたない家ですけれども、浜からあがりたての、おいしいおさかなだけは保証します。」

私は行く事にした。

私の疎開していた町から、汽車で三、四時間、或る港町の駅に降りると、小川新太郎君は、りゆうとした背広服姿で、迎えに来ていた。

「君は、こんないい洋服を持っているくせに、僕の家へ来る時には、なぜあんな、よごれた軍服みたいなものを着て来るのかね。」

「わざと身をやつして行くのです。水戸黄門でも、最明寺入道でも、旅行する時には、わざときたない身なりで出かけるでしょう？　そうすると、旅がいつそう面白くなるのです。遊び上手じょうずは、

身をやつすものです。」

旧曆のお正月の頃で、港町の雪道は、何か浮き浮きした人の往き来で賑にぎわっていた。曇くもっていた日であつたが、割にあたたかで、雪道からほやほや湯気が立ち昇っている。

すぐ右手に海が見える。冬の日本海は、どす黒く、どたりどたりと野暮やぼつたく身悶みもたえしている。

海に沿つた雪道を、私はゴム長靴で、小川君はきゆつきゆつと鳴る赤皮の短靴で、ぶらぶら歩きながら、

「軍隊では、ずいぶん殴なぐられましたね。」

「そりや、そうだろう。僕だつて君を、殴つてやろうかと思う事があるんだもの。」

「小生意気に見えるんでしょかね。しかし、軍隊は無茶苦茶ですよ。僕はこんど軍隊からかえつて来て、おうがい 鷗外全集をひらいてみて、鷗外の軍服を着ている写真を見たら、もういやになつて、全集をみな叩き売つてしまいました。鷗外が、いやになつちやいました。死んでも読むまいと思ひました。あんな、軍服なんかを着ているんですからね。」

「そんなにいやなら、君だつて、着て歩かなけやいいじやないか。身をやつすもクソも無い。」

「あまり、いやだから着て歩くのです。先生には、わからないでしょうね。とにかく旅行は、屈辱の多いものでしょう？ 軍服はそんな屈辱には、もつて来いのものなんだから、だから、それだ

から、わからねえかなあ、作家訪問なんてのも一種の屈辱ですか  
らねえ。いや、屈辱の大おおぜき関せきくらいのところだ。」

「そんな生意気な事を言うから、殴られるんだよ。」

「そうかなあ、いやになるね。ひとを殴るなんて、狂人でなくち  
や出来ない事なんじゃないかな。僕はね、軍隊で、あんまり殴ら  
れるので、こつちも狂人の真似をしてやれと思って、工夫して、  
両方の眉まゆを綺麗そに剃り落して上官の前に立ってみた事さえありま  
した。」

「そりやまた、思い切った事をしたものだ。上官も呆あきれたろう。」

「呆れていました。」

「さすがにそれ以後は殴られなくなつたろう。」

「いいえ、かえってひどく殴られました。」

小川君の家へ着いた。山を背にして海に臨んだ小綺麗な旅館であつた。

小川君の書斎は、裏二階にあつた。明窓浄几、筆硯紙墨、皆極精良、とでもいうような感じで、あまりに整頓されすぎていて、かえつて小川君がこの部屋では何も勉強していないのではないかと思われたくらいであつた。床柱に、写楽の版画が、銀色の額縁に収められて掛けられていた。それはれいの、天狗てんぐのしくじりみたいなの、グロテスクな、役者の似顔絵なのである。

「似ているでしょう？ 先生にそっくりですよ。きようは先生が来るというので、特にこれをここに掛けて置いたのです。」

私はあまり、うれしくなかつた。

私たちは、机の傍の炉を挟はさんで坐つた。彼の机の上には、一冊の書物が、ひらかれたまま置かれていた。たつたいままで読んでいたという形のつもりかも知れないが、それもまた、あまりにきちんとひらかれて置かれているので、かえつて彼が、その本をページも読まなかつたのではなからうかという失礼な疑念がおのずから湧わき上るのを禁じ得なかつたくらいであつた。

私が机上をちらと見て思わず口をゆがめたのを、素早く彼は見てとつた様子で、憤然、とでも形容したいほどの勢いで、その机上の本を取り上げ、

「いい小説ですね、これは。」



と言った。

「わるい小説は、すすめないさ。」

その本は、私が、どんなものを読めばいいかという彼の問いに  
応えて、ぜひそれを読めとすすめた短篇集なのであった。

「まったく偉い作家だ。僕はいままで知らなかった。もっと早く  
から読んでおればよかった。万世一系とは、こんな作家の事を言  
うのです。この作家にくらべたら、先生なんかは乞食こじきみたいだ。」

その短篇集の著者が、万世一系かどうか、それは彼の言論の自  
由のしからしむるところであろうから、敢あえて不問に附するとし  
ても、それに較くらべて私が乞食だという彼の断案には承知できない  
ものがあつた。としの若いやつと、あまり馴なれ親しむと、えてし

てこないやな目に遭う。

私はもういちど旅館の玄関から入り直して、こんどはあかの他人の一旅客としてここに泊つて、ぜが非でも勘定をきちんと支払い、そうして茶代をいやというほど大ふんばつして、この息子とは一言も口をきかずに帰つてしまおうかとさえ考えた。

「さすがに僕の先生は、眼が高いと思ひましたよ。じつさい、これは面白かった。」

小川君は、しかし、余念なさそうに、そう言う。

僕のほうで、ひがみすごしているのかな？ と私は考え直した。

「若旦那。」

と襖ふすまのかけから、女のひとが、新太郎君を呼んだ。

「なんだ。」

と答えて立って襖をあけ、廊下に出て、

「うん、そう、そう、そうだ。どてら？　もちろんだ。早くしろ

。」

などと言っている。

そうして、部屋の外から私に向って、

「先生、お湯にはいりましょう。どてらに着かえて下さい。僕もいま、着かえて来ますから。」

「ごめん下さい。いらっしやいます。」

四十前後の、細面の、薄化粧した女中が、どてらを持って部屋へはいつて来て、私の着換えを手伝った。

私は、ひとの容貌ようぼうや服装よりも、声を気にするたちのようである。音声の悪いひとが傍にいと、妙にいらいらして、酒を飲んでもうまく酔えないたちである。その四十前後の女中は、容貌はとにかく、悪くない声をしていた。若旦那、と襖のかけで呼んだ時から、私はそれに気が附いていた。

「あなたは、この土地のひとですか？」

「いいえ。」

私は風呂場に案内せられた。白いタイル張りのハイカラな浴場であつた。

小川君と二人で、清澄なお湯にひたりながら、君んとこは、宿屋だけではないんじゃないか？ と、小川君に言ってやって、私

の感覚のあなどるべからざる所以ゆえんを示し、以て先刻もつの乞食の仕返しをしてやろうかとも考えたが、さすがに遠慮せられた。別に確証があつての事ではない。ただふつとそんな気がしたただけの事で、もし間違つたら、彼におわびの仕様も無いほど失礼な質問をしてしまつた事になる。

その夜は、所謂いわゆる地方文化の粹すいを満喫まんきつした。

れのいのあの、きれいな声をした年増の女中は、日が暮れたら、濃い化粧をして口紅などもあざやかに、そうしてお酒やらお料理やらを私どもの部屋に持ち運んで来て、大旦那の言いつけかまたは若旦那の命令か知らぬが、部屋の入口にそれを置いてお辞儀をして、だまってそのまま引下つてしまふのである。

「君は僕を、好色の人間だと思ふかね。どうかね。」

「そりや、好色でしょう。」

「実は、そうなんだ。」

と言つて、女中にお酌でもさせてもらうように遠まわしの謎なぞを掛けたりなどしてみたのであるが、彼は意識的にか、あるいは無意識的にか、一向にそれに氣附かぬ顔をして、この港町の興亡盛衰の歴史を、ながながと説いて聞かせるばかりなので、私はがっかりした。

「ああ、酔つた。寝ようか。」

と私は言つた。

私は表二階の、おそらくはこの宿屋で一ばんよい部屋なのであ

ろう、二十畳間くらいの大きい部屋のまんなかに、ひとりで寝かされた。私は、くるしいくらいに泥酔していた。地方文化、あなどるべからず、ナンマンダ、ナンマンダ、などと、うわごとにしたとりとめない独り言を呟ひとごとつぶやいて、いつのまにか眠ったようだ。

ふと、眼をさました。眼をさました、といつても、眼をひらいたのではない。眼をつぶったまま覚醒し、まず波の音が耳にはいり、ああここは、港町の小川君の家だ、ゆうべはずいぶんやつかいをかけたな、というところあたりから後悔がはじまり、身の行末も心細く胸がどきどきして来て、突然、二十年も昔の自分の奇妙にキザな振舞いの一つが、前後と何の聯れんかん関も無く、色あざやかに浮んで来て、きやつと叫びたいくらいのたまらない気持にな

り、いかん！ つまらん！ など低く口に出して言ってみたりして、床の中で輾転てんてんしているのである。泥酔して寝ると、いつもきまつて夜中に覚醒し、このようなやりきれない刑罰の二、三時間間を神から与えられるのが、私のこれまでの、ならわしになっているのだ。

「すこしでも、眠らないと、わるいわよ。」

まぎれもなく、あの女中の声である。しかし、それは私に向つて言ったのではない。私の蒲団ふとんの裾すそのほうに当たっている隣室から、ひそひそと漏れ聞えて来る声なのである。

「ええ、なかなか、眠れないんです。」

若い男の、いや、ほとんど少年らしいひとの、いやみのない応



答である。

「ちよつと一眠りしまししょうよ。何時ですか？」と女。

「三時、十三、いや、四分よんぶんです。」

「そう？ その時計は、こんな、まっくら闇の中でも見えるの？」

「見えるんです。蛍光板というんです。ほら、ね、ほたる蛍の光のよう

でしよう？」

「ほんとね。高いものでしょうね。」

私は眼をつぶったまま、寝返りを打ち、考える。なあんだ、やつぱり、そうだったじゃないか。作家の直観あなどるべからず。

いや、好色漢の直観あなどるべからず、かな？ 小川君は、僕のことを乞食だなんて言つて、ご自身大いに高潔みたいに気取つてい

やがったけれども、見よ、この家の女中は、お客と一緒に寝ているじゃないか。明朝かれにさつそく、この事を告げて、彼をしてろうばい狼狽させてやるのも一興である。

なおもひそひそ隣室から、二人の会話が漏れて来る。

その会話に依よつて私は、男は帰還の航空兵である事、そうしてたつたいま帰還して、昨夜この港町に着いて、彼の故郷はこの港町から三里ほど歩いて行かなければならぬ寒村であるから、ここで一休みして、夜が明けたらすぐに故郷の生家に向つて出発するというプログラムになっているらしい事、二人は昨夜はじめて相逢つたばかりで、別段旧知の間柄でも無いらしく、互いに多少遠慮し合っている事などを知った。

「日本の宿屋は、いいなあ。」と男。

「どうして？」

「しずかですから。」

「でも、波の音が、うるさいでしょう？」

「波の音には、なれています。自分の生れた村では、もっともつと波の音が高く聞えます。」

「お父さん、お母さん、待っているでしょうね。」

「お父さんは、ないんです。死んだのです。」

「お母さんだけ？」

「そうです。」

「お母さんは、いくつ？」と軽くたずねた。

「三十八です。」

私は暗闇の中で、ぱちりと眼をひらいてしまった。あの男が、はたち前後だとすると、その母のとしは、そりやそうかも知れぬ、その筈だ、不思議は無い、とは思ったものの、しかし、三十八は隣室の私にとつても、ショックであつた。

「……………」

とでも書かなければならぬように、果して女は黙ってしまった。はつと息を呑んだ女の、そのかすかな気配が、闇をとおして隣室の私の呼吸にびたりと合つた感じがした。無理もない、あの女は三十八か、九であろう。

三十八と聞いて、息を呑んだのは、女中と、それから隣室の好

色の先生だけで、若い帰還兵は、なんにも気づかぬ。

「あなたは、さつき、指にやけどしたとか言っていたけど、どうですか、まだ、いたみますか。」と、のんきに尋ねる。

「いいえ。」

私の気のせいか、それは、消え入るほどの力弱い声であった。

「やけどに、とてもよくきく薬を自分は持っているんだけどな。

そのリュックサックの中にはいつているんです。塗ってあげましょうか。」

女は何も答えない。

「電気をつけてもいいですか？」

男は起き上りかけた様子だ。リュックサックから、そのやけど

の薬を取り出そうと思っっているらしい。

「いいのよ、寒いわ。眠りましょう。眠らないと、わるいわ。」

「一晩くらい眠らなくても、自分は平気なんです。」

「電気をつけちゃ、いや！」

するどい語調であった。

隣室の先生は、ひとりうなずく。電気を、つけてはいけない。

聖母を、あかるみに引き出すな！

男は、また蒲団にもぐり込んだ様子だ。そうして、しばらく、

二人は黙っている。

男は、やがて低く口笛を吹いた。戦争中にはやった少年航空兵の歌曲のようであった。



「うむ。ぐっすり眠った。」

私は隣室のあの事を告げて小川君を狼狽させる企てを放棄して  
いた。そうして言った。

「日本の宿屋は、いいね。」

「なぜ？」

「うむ。しずかだ。」



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月23日公開

2005年11月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 母

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>